

## 「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告（第2回）

「一緒にテーマを考えよう」

2011年6月21日 19:10～21:10 コミュニティセンター dista 出席者16名

### ■司会・進行

ジャンププラス代表、長谷川博史氏

### ■主催者あいさつ

公益財団法人エイズ予防財団、白阪琢磨理事。

4月に公益財団法人として認可され、それを機に組織としても生まれ変わりたいと思う。今後はより一層 NGO/NPO と一緒にエイズ対策に取り組んでいきたい。その第一段階としてキャンペーンテーマについてお話させていただきたい。当財団が皆様にとっても無いと困る存在になれるよう、ご理解とご協力の程をお願いしたい。

### ■冒頭報告「キャンペーンテーマとは何か」

公益財団法人エイズ予防財団の宮田一雄理事がフォーラムの趣旨、背景などを説明。6月14日に東京の akta で実施したフォーラムのときとほぼ同趣旨の内容。

### ■長谷川氏からのコメント

ふれいす東京や Rainbow Ring が中心となって発信した「Living Together」は、HIV 陽性者がすでに社会の中で一緒に生きているというリアリティを伝えていくメッセージである。2002年からキャンペーンが始まり、最近韓国やシンガポールでもこのメッセージが活用されるようになった。本来は **we are already living together** と **already** が強調されている。

ところが、厚生労働省がテーマとして活用した結果、提唱者の真意と異なる伝わり方になってしまった。たとえば「大切な人を守る」というサブテーマがつけられ、ことばは綺麗だが、陽性者排除につながる意味がこめられてしまったのだ。

かつて「カレシの元カノの元カレを知っていますか。」という広告コピーもあった。異性愛のみを想定させるメッセージは、それ以外の性のありようを排除する意識の反映でもある。

キャンペーンテーマの策定プロセスを重視することは非常に重要な意味を持っていることをまず理解する必要がある。

### 質疑応答

・WAC（世界エイズキャンペーン）のポスターは、共通のテーマのもとでいくつかの表現を展開している。テーマと表現との関係を考えるうえで参考になる。対象によって表現を工夫し、一番伝わりやすいビジュアルをもってきているのだ。共通のコンセプトのもとに、それぞれの地域、コミュニティで多様なメッセージを表現していけばよいのではないか。

・予防のメッセージが HIV 陽性者を排除しないかたちで成り立つことが重要だ。知らない間に

誰かを傷つけていることもある。傷つくのは、感染リスクが高いとされる層であることが多い。

### 【話題提供】

10 分間の休憩後、dista の活動に携わる参加者から短い報告が行われた。

コミュニティセンターdista は MSM に向けて働きかけを行っている。特にコミュニティや商業施設を使う人々を対象に活動を続け、情報を送ることで行動も変わってきたと受け止めている。

しかし、年齢で言えば 20 代前半以下の若年層や 45 歳くらいから上の中高年層には情報が届きにくい。自分のこととは思えないといった理由から、情報を避けたり、上手く入り込めなかったりする人も多い。どうすればその人たちとつながりをもてるかという課題がある。

エイズを取り巻く環境は大きく変わっているが、エイズに対するとらえ方には人によって大きな開きがある、あまりにも楽観視している人もいれば、情報が得られず死の病としての恐れを強く持っている人、感染ルートも知らない人もいる。どこに向けて、どのように発信するのかも課題の 1 つである。

### ディスカッション

以下のような意見が出された。

#### 《話題提供に関して》

- MSM の中に楽観と無知の二極分化があり、対象を絞り込むことの難しさを感じる。
- コミュニティセンターという場所があることの利点は？  
⇒場所があることで本日のようなフォーラムも開催可能だし、人も集まってくる。コミュニティに情報資材を届ける拠点であり、現場の反応を感じることもできる。
- dista 利用者の中心は 20～30 代。20 代以下は少ない。保健所や学校も「場所」になり得るのではないか。⇒dista 利用者の中心は HIV の深刻な拡がりの層でもある。
- dista がスタートして約 10 年の間に来場者の年齢分布は変化しているのか。  
⇒最近のアンケートを見ると、ゆっくりと年齢層は広がってきている。その速度は相当遅い。
- コミュニティ以外の違うセクターへの働きかけは（保健関係者への質問）？  
⇒青少年への働きかけを試み、まずは学校教員の研修を進めている。
- 先生たちがセクシャリティの話をする、存在のリアリティが伝わっていかない。自治体と dista が連携・協力して教員キャンペーンを行ってもよいのではないか。
- ゲイやバイセクシャルと性同一性障害とを混同している保健や教育の専門家もいる。教育の現場で正確な情報を伝えられるようにする必要がある。
- dista 発行の SaL+ は、HIV 情報だけでなく、出会いの場、グルメ情報、タウンマップなどさまざまな情報とメッセージが入っており、いつも楽しく読んでいる。各号のテーマはどのように決めているのか。そこからキャンペーンテーマのヒントが得られるかもしれない。  
⇒それほど体系的に決めているわけではない。dista での調査、日々の相談、対面等から出てきた小さな疑問や課題を出来るだけ広く拾っている。

### 《支援や医療の現場の課題》

- ・異なる部門間の連携が見えてくるとよい。MSM、トランスジェンダー、セックスワーカー等の横へのつながりもあるので、どう情報を共有し、一緒に活動するか。
- ・以前は相談等も20代が中心だったが、近年は40、50代まで広がり、ようやく周知が行き届いてきた印象がある。新たに陽性と判明した人には必ず支援リソースの情報が届くようにしている。例えば陽性とわかったときに上手く医療機関に橋渡しする。病院と密に連絡がとれるようになったことが大きい。調査のプログラムを通じて医師やソーシャルワーカー、コーディネーター等と連携をはかることができ、情報源が広がった。
- ・関西の課題の1つは、女性の陽性者グループがないことだ。女性だけの集まりに参加したいという希望を受けても対応が難しい。個別の面談の場もまだ少ない。
- ・高齢層への働きかけが難しいと考えられてきたが、支援が充実することで周知が可能になってきた。結果的に支援が上手くいくと予防にも効果が出てくる。
  - ⇒発症してから病院に来る人たちのケア、MSMのセックスワーカーへのケアを考えなければならない。発症して来院する高齢者には、セクシャリティを明かさない人も多い。奥さんや家族が横についていたり、本人も言い出せなかったりする。予防行動や情報へのアクセスにつなげる手がかりを引き出すのが難しい。
  - ⇒最初は明かせなくても、背景を共有していくことが大切。受け入れられたとか、話しても大丈夫といった気持ちになれば予防行動や情報へのアクセスにつながる。
  - ⇒排除されていない、阻害されていないという感じを受けられることが大切。全体に通じる課題の1つだと思う。

### 《その他の課題》

- ・HIVには様々な支援が必要。いろいろな機関と連携する必要性を実感する。若者の教育、教員の研修、在宅患者の地域支援、支援者への力づけなどを通し、社会の理解や支援が深まることを期待したい。
- ・6月の検査普及週間イベントの街頭キャンペーンで啓発パンフレットを配ったが、「HIV?」「要らない」と抵抗感を示す人もいた。学校教育の不足、保健所等で無料・匿名検査を行っていることを知る機会の大切さを感じる。
- ・全国レベルのキャンペーンは各地で同じことをするのか、役割分担をした方がよいのか。
  - ⇒国として共有できるテーマは1つになるが、キャンペーン自体は地域の実情に合わせてほしい。本来なら、様々な課題が積み上げ式に出て、今年はこのテーマでいこうというかたちになってほしい。
- ・動向委員会の報告を見ても、いまはMSMを対象にした支援策に力を入れる必要がある。だからこそ、啓発には、いまMSM対策に力を入れることに広く社会の理解が広がるようなメッセージもなければならない。
  - ⇒検査件数の減少、関心の低下、学校でのエイズの授業数などは検討課題である。教員向け資料、若者への教育、記者へのfact sheetの工夫など検討していけたらよいと思う。
  - ⇒MSMがよく来る商業施設で啓発を行っているが、この6~7年、来場者が年々減っている印象がある。来なくなった人は一体どこへ行ったのか。